opusdei.org

第一章:この世界を 愛した司祭 (11.Q01)

1. 私は無価値なみじめな者、しかし価値ある愛で一杯の者 (11.Q01)

2010/04/09

11.Q01 - 私には、思い出深い場面があります。1972年11月22日、人であふれたブラファという学校の体育館で、エスクリバー・デ・バラゲル師との団欒があったときのことです。体育館は講堂に変わり、創立者は舞台

の真中に立っていました。聴衆の一 人が、毎日の出来事に不平をこぼし ながら過ごしている人について話 し、「パドレ、このように、非難し たり嘆いたり、悲観的に考える人を どのように手伝ったらいいのでしょ うか。 | と質問しました。すぐに答 えがありましたが、自己の弱さに基 づく理解に満ちたものでした。「私 には多くの欠点がありましたし、今 でもあります。欠点のない人が居る のでしょうか。もし、そういう人 が 居たら博物館に収めましょう…。私 は、少年時代から多くの欠点と戦っ てきましたが、この戦いは一生続く でしょう。

オプス・デイの創立者を見ると、 1990年に教皇ヨハネ・パウロ二世が 宣言されたように、諸徳を英雄的な レベルまで実行するに至った人に特 有なことでしょうが、欠点はその素 晴らしい戦いの中に隠れて周りの人 には見えません。しかし、他の人は オプス・デイの創立者にたまにしか会わない私たちには、その欠点は隠れて見えず、ただ神のみ旨にしっかりと従う姿に惹きつけられるだけでした。1950年のカステルガンドルフォでの研修会の思い出によると、ハビエル・エチェバリア司教も同じ事を経験されたのですね。

11.A01 - 8月の末頃でした。私は、自分たちが涼しい所で過しているのに、モンセニョール・エスクリバー・デ・バラゲル師は暑いした。毎日午後5時頃、ドン・アルバロとの場合と一緒に、トポリーノと、ともうで私たちのところで乗けていました。そこで研修を受けていました。そこで研修を受けていずれのメンバーと私達他の国から来ている者たちの形成に自ら携わるためした。

私たちがどのように日々を過ごしているか尋ね、様々な面から聖性の戦いを説明し、オプス・デイの精神を教えました。これは通常の一日の仕事が終えてからのことでした。師はオプス・デイの統治の仕事に加えて、本部が建設中で、しかも、乏しい資力の中の非常に困難な工事を気遣う、という仕事がありました。

当時、私は、パドレが大きな荷を肩にし、重い糖尿病からくる疲れに苦しめられていることに気づきませんでした。その喜びと、自分の事を顧みない献身を私たちに生き生きと伝えようと、師は愛と捧げる心でこれらの難儀を乗り越えていたのです。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/dizhang-konoshi-jie-woai-shitasi-ji-11q01/(2025/12/11)